

「初等音楽Ⅱ」における「創作」指導案の作成と実践

大西 隆之 小見 山 純 一

岐阜聖徳学園大学教育学部

柴 田 恭 男

岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師

Lesson planning and composition practice for “Elementary Education Music Ⅱ” :

Takayuki OHNISHI, Junichi KOMIYAMA, Yasuo SHIBATA

キーワード：初等音楽 創作 一部形式 二部形式

I. はじめに

岐阜聖徳学園大学において教員免許状取得の必修科目として「初等音楽Ⅱ」が設定されている。この科目は、学校教育課程に所属している全学生に開講されている科目であり、A部門：「歌唱」「鑑賞」B部門：「創作」「器楽」の2部門4項目に分けられ、各部門50点満点の合算で評価が行われる。この科目は3年生時開講となっており、1年生時に開講される「初等音楽Ⅰ」を受講し、基礎的な音楽の知識と技術を習得したうえで受講することが想定されている。今回この4項目のうち「創作」を担当している教員が授業の問題点を持ち寄り、その解決策について意見交換をしたうえで指導案と配付資料の作成を行い、その資料によった授業の成果に考察を加えて、より良い指導案、配付資料の作成につなげようということになった。

II. テーマの設定理由

初等音楽Ⅰで基礎的な知識と技術について授業を受けているとは言え、受講者のレベルにはかなりのばらつきがあり、受講者全員が初等音楽Ⅱの内容に十分に対応できるとは言えないところもある。そのため教材として提供する資料をどのようにするかが、授業担当者の頭の痛い問題であった。

これまで、各担当者がそれぞれの考えで資料を作成し、受講者に配付して授業を行ってきた。しかし、少しでも効果の上がる資料を作成することが学生たちにとって必要ではないかとの考えのもと、また指導上の問題点を共有し、意見交換をすることにより、より良い指導が行えるのではないかとの考えから、共通の指導案と配付資料を作成することにした。

授業実践後、学生の意見も聞きながら、それまでの授業との比較を行い、更に充実した指導案、配付資料の作成と授業の改善につなげたいと考えている。

III. 平成28年度の実践状況と平成29年度以降にむけて

平成28年度は3人の教員によって「創作」を担当した。各教員の指導方法には大きな括りはあるものの、到達目標へのアプローチの仕方や細部にわたっては、各教員に任されていた。

3人のこれまでの実践方法の特徴的な部分を取り上げて、あえて名前を付けると、音をひとつずつ選びながら結果としてひとつの動機を形成していく「ゲーム型」、複数の部分動機から気に入ったものを選択し、動機を形成していく「選択型」、リズムパターンを示し、そのリズムに音を乗せていく「リズム提示型」とすることができる。もちろん同じ到達目標に向かうわけであるから、3つの型に分けられたとは言え、これらの実践方法は、互いにかなりたくさんの重なり合った部分を持っている。

今回、このように異なった指導方法のそれぞれから良い点を拾い出し、ひとつの指導案にまとめ、そのテキストを使って授業実践を行った。対象とした学生は、平成29年度教育学部3年生を中心とした履修生のうち、前半に創作を受講した6クラス188名である。なお、実践期間は平成29年4月から5月である。

以下は作成した指導案とその実践結果である。

IV. 作成した指導案

1. 一部形式

(1) 第1時限目の授業計画

①本時のねらい

一部形式とは、4つの動機（2つの小楽節、1つの大楽節）によって構成された8小節からなる形式である。どのような動機の連結を行うかは様々であり、一部形式とひとことで言っても、その実態はかなり多様である。本時においては、最も取り組みやすいA（a+a'）A'（a+a''）という整然とした構造からなる一部形式を理解し、与えられたリズムパターンに従って、8小節の旋律を創作できるようになる。

②本時の実践

本時は楽曲構成についての基本的な語句（動機、小楽節、大楽節）についての説明から入り、小学校の教科書にも取り上げられている「とんび」「星の世界」の前半部分をお手本に、一部形式について学ぶ。その理解の上に、同じパターンで各自創作を試みる。初めての経験に戸惑う学生もいると予想されるため、机間巡視をこまめに行う。授業計画の詳細については表1の通りである。

表1 第1時限目の授業計画案

	学習活動	指導上の留意点
導入 (10)	○楽曲構成の基本的な語句について学ぶ。 ・動機、小楽節、大楽節の意味を理解する。	○多くの楽曲が偶数小節からなる、整然とした構造であることを説明する。
展開 (75)	○一部形式を理解する。 ・「とんび」の前半部分8小節を黒板、または教科書から各自の五線紙に写譜する。 ・旋律の構造を動機から分析しA（a+a'）A'（a+a''）という形式からなることに気付く。 ・4小節目の「レ」の音が、句読点でいえば「、」にあたり、8小節目の「ド」が「。」にあたることを感じる。 ・板書された「星の世界」の前半8小節のメロディを分析し、同じ構造であることを確認する。 ○一部形式の旋律を創作する。 ・与えられたリズムパターンによる8小節からなるハ長調の旋律を作る。 ・創作した旋律が自然で歌いやすいものかどうか、よく味わい、ぎこちない箇所があれば修正する。	○正確な記譜がなされているか確認する。（音部記号、音符の付点やぼうの向き等） ○奇数小節のリズムが同じであることに気付かせる。 ○旋律にコードネーム（和音記号）を付け、それを実際に音で確認することにより、4小節目の半終止、8小節目の全終止の感じをつかませる。 ○「星の世界」はハ長調なので、混乱しないよう注意する。必要に応じて移動ド読みをさせる。 ○「ドミソ」のいずれかの音で開始し、4小節目は「ソシレ」のどれかでひと休みし、8小節目は「ド」で終わることを最初に取り決める。 ○音域はおおむね1オクターブ程度に収め、不自然な音の動きになっていないか、各自キーボード、リコーダー等で確認しながら作業を進めるよう注意を促す。 ○机間巡視により、添削指導を行う。 ○作業を早く終えた学生には、リズムパターンなしで最初から作ってみることを勧める。
まとめ (5)	○振り返り ・各自が本時の活動を振り返り、プリントに反省を記入する。	○本時の感想や成果と、次回の課題を記入するよう、助言する。 ○次回までに作ったものを清書しておくよう伝える。

(2) 第2時限目の授業計画

①本時のねらい

創作の視野を広げるため、A (a+b) A' (a'+b') という別パターンによる一部形式を学び、自作のリズムパターンによる一部形式の旋律の創作ができるようになる。

②本時の実践

本時は前回の復習から入り、代表的な一部形式の特徴を再確認した上で、前回とは違ったパターンによる一部形式の創作に取り組む。「春が来た」「うみ」を参考に「とんび」「星の世界」との違いに気づき、創作の幅を広げる。机間巡視による添削指導を行い、完成した作品を提出する。授業計画の詳細については表2の通りである。本時で使用した授業プリントは巻末の図5に掲載した。

表2 第2時限目の授業計画案

	学習活動	指導上の留意点
導入 (10)	○前時の復習 ・一部形式の特徴を再確認する。	○模範作例を板書し、旋律の流れを確認し、自作と比較させる。
展開 (75)	○別のパターンによる一部形式を知る。 ・「春が来た」を黒板、または教科書から各自の五線紙に写譜する。 ・旋律の構造を動機から分析し、A (a+b) A' (a' +b') という形式からなることに気付く。 ・前回学んだパターンと、4小節目、8小節目の感じは同じであることを理解する。 ・8小節の中に「起承転結」のドラマの流れが存在することを感じる。 ・板書された「うみ」の旋律を分析し、同じ構造であることを確認する。 ○このパターンによる一部形式の旋律を創作する。 ○完成した作品を提出する。(前回分を含め、2～3作品)	○よく知られている旋律なので、拍子と最初の音のみ示し、各自楽譜化してみようことを勧める。 ○同じリズムの繰り返しにより、まとまりが図られていることを感じさせる。 ○半終止、全終止を確認させる。 ○歌詞との関連性にも注目させる。 ○「うみ」はト長調なので混乱しないよう注意する。必要に応じて移動ド読みをさせる。 ○机間巡視により、添削指導を行う。前回のものも併せて添削する。 ○最初から自分で作ることを原則とするが、初めの1小節を与え、続きを作ること認める。 ○楽譜に誤りがないか、再度確認を促す。
まとめ (5)	○振り返り ・各自が本時の活動を振り返り、プリントに反省を記入する。	○2回にわたる創作活動を振り返り、成果と課題(一部形式を理解し、創作できたか)について記入するよう、助言する。

2. 二部形式

(1) 第3時限目の授業計画

①本時のねらい

コンバース作曲「星の世界」、フォスター作曲「故郷の人々」を用いて、A (a+a') B (b+a') からなる二部形式の特徴について理解すると共に、「変化」部分(小楽節)の旋律を創作することができる。

②本時の実践

本時は、コンバース作曲「星の世界」を用い、曲の特徴を探る所から始める。次に「故郷の人々」の写譜等の活動を通して、二部形式についての理解を深める。その後、個人で「変化」部分の動機を作る。教員は机間巡視により、添削指導を行う。動機ができた学生から、それを用いて「変化」部分(小楽節)の創作活動に入る。授業計画の詳細については表3の通りである。本時で使用した授業プリントは巻末の図6に掲載した。

表3 第3時限目の授業計画案

	学習活動	指導上の留意点
導入 (10)	○コンバース作曲「星の世界」を聴く。 ・後半部分の旋律に着目しながら曲の特徴について感じたことを交流する。	○前時までに取り組んだ前半部分と後半部分との違いや共通点に気付かせるよう、声掛けをする。
展開 (75)	○二部形式を理解する。 ・フォスター作曲「故郷の人々」を聴く。 ・プリントの譜例で空いている部分に「故郷の人々」のメロディを書き込む。 ・二部形式の特徴を確認する。 (最初の4小節とそれに続く4小節の類似性、3段目の変化とクライマックス、最後の4小節が2段目と原則的に同じであること) ・「故郷の人々」を歌い、各段落における、句読点の感じを掴みとる。 ○二部形式で作られた他の作品をについて理解する。 ・滝廉太郎作曲「荒城の月」、草川信作曲「夕焼け小焼け」を用いて、短調による旋律の例や、繰り返しを用いずに作られているものの例を示す。 ○「変化」部分の動機を創作する。 ○創作した動機を使って、「変化」部分（小楽節）を創作する。	○正確に記譜できているか確認する。 ○楽譜上から特徴を見つけさせるように声掛けをする。 ○4、8、12、16小節の最後の休符の意味（息継ぎ、および段落の切れ目を示す）についても考えさせる。 ○音楽には例外が付きものであるということ、自由な発想も可能であるということも説明する。 ○机間巡視により、添削指導を行う。 ○創作に苦勞している学生には、いくつかのリズムパターンを示す。
まとめ (5)	○振り返り ・各自が本時の活動を振り返り、プリントに反省を記入する。	○本時の感想や成果と、次回の課題を記入するよう、助言する。 ○本時に「変化」部分が完成しない場合、次回までに完成させるよう伝える。

(2) 第4時限目の授業計画

①本時のねらい

楽譜作成のための約束事について理解すると共に、「回帰」部分をつなげ二部形式の作品を完成させることができる。さらに、完成した作品を交流し合い、互いの良さを感じ取ることができる。

②本時の実践

本時は、前時の取り組みを振り返り二部形式の特徴を再確認した後、「回帰」部分をつなげて、二部形式の作品を完成させる。楽譜作成のために必要な約束事が守られているかを各自チェックした後、完成した作品を学生同士で交流し合い、それぞれの作品の良さを見つける。さらに、三部形式についても触れ、メロディの発展と音楽の形式との関連性をより理解させる。授業計画の詳細については表4の通りである。

表4 第4時限目の授業計画案

	学習活動	指導上の留意点
導入 (5)	○前時の復習 ・二部形式の特徴を再確認する。	○現段階でどこまでできているかを確認させ、本時の内容を理解させる。
展開 (80)	○「回帰」部分をつなげて、二部形式の作品を仕上げる。 ・楽譜作成のために必要な約束事を伝える。 ○完成した作品を学生同士で交流し、確認する。 ・ペアで互いの作品を見合い、楽譜作成のための約束事の最終確認を行う。 ・互いの作品について意見交流する。	○机間巡視により、添削指導する。 ○歌いにくい箇所や不自然な箇所を指摘し、もう一度工夫できることを促す。 ○楽譜作成のために必要な約束事を確実に守れるよう、丁寧かつ確かな表現で伝える。

展開 (80)	・最終確認が済んだ学生は作品を提出する。 ○二部形式の前半部分をそのまま「回帰」部分とすることにより、三部形式ができることを紹介する。	○提出された作品の中から、いくつかクラス全体に紹介をする。 ○メロディの発展と音楽の形式との関連性をより理解させる。
まとめ (5)	○振り返り ・各自が本時の活動を振り返り、プリントに反省を記入する。	○4回の作曲活動全体を振り返り、成果と課題について記入するよう、助言する。

V. 考察・分析

1. 第1時限目を終えて

学生のアンケート結果（表5・図1）から考察すると、初めは創作という作業に不安と戸惑いが見られたが、これは初めての経験であれば当然予想されることである。だが、創作のヒント、及び手順を示すことにより、その不安は解消され、興味や関心に変化していったことが窺える。小学校の教科書に取り上げられている身近な楽曲を手本とし、代表的な一部形式のパターンとしたことも理解を早める要因になったと考える。楽典的内容の復習、楽譜を書く事に慣れるための写譜の作業も有効であった。ただ、学生間に温度差があり、創作の面白さ、楽しさをいち早く感じることでできる学生がいる反面、なんとなく鍵盤を触って適当に音を並べているだけの作品も見受けられた。また、基本的な記譜の約束事が守られず、不完全な楽譜もいくつか見られた。しかし、個別に丁寧な添削を行うことにより、間違いを修正し、より自然な流れになることを目の当たりにして、多くの事柄に気付く学生も多々あった。

表5 ふりかえりシートの自己評価項目と評価の平均（第1時限）

自己評価項目	評価の平均
創作活動に興味・関心を持つことができたか	4.7
一部形式について理解することができたか	4.6

- ＜成果＞ ・実際に初めて作曲をしてみて、思ったよりも楽しく簡単にできることがわかった。
・半終止と全終止を意識することにより、自然な流れの旋律を作ることができた。
・作曲は楽しいと思えるようになった。ひとつの音を変えるだけで曲が大幅に変わることがわかった。
- ＜課題＞ ・法則は理解できたが、それを活かして実際に曲を作れるようになるまでにはまだまだと感じる。
・楽譜を書くのに慣れていないせいもあり、ひとつ作るのに時間がかかり過ぎた。
・ありきたりな曲になってしまった。もっと独創的な曲を作りたい。

図1 ふりかえりシートの自由記述（第1時限）

2. 第2時限目を終えて

「春がきた」や「うみ」などの具体例を示したことで、一部形式についての理解はより深まったように感じた。また、1時限目にぎこちなかった旋律も2時限目にはこなれたものになり、明らかな進歩が見られた。それに伴って、曲を作ることへの前向きな姿勢の学生が増え、更に高みを目指そうとする意欲も感じられた。意欲が高じて、複雑なリズムや音型を駆使しすぎて迷路に入ってしまった作品があったが、その一生懸命な探究心は評価したい。5段階による学生の自己評価（表6・図2）に現れている通り、ほぼ全員の学生が一部形式について理解し、創作することができた。しかし依然として楽譜の基本的なミス、不備が散見されたのも事実であり、丁寧な机間巡視、および添削が必要と痛感した。

表6 ふりかえりシートの自己評価項目と評価の平均（第2時限）

自己評価項目	評価の平均
自然な流れに沿った旋律を作ることができたか	4.6
一部形式の作品を完成させることができたか	4.7

<p>＜成果＞ ・前回よりスムーズに曲を作ることができた。メロディーの流れがキレイなのかを気にしながら作ることができた。</p> <p>・一部形式にいろいろな形があることがわかった。自分で考えることがふえた。</p> <p>・クライマックスに一番高い音を持っていくと良いことがわかった。</p> <p>＜課題＞ ・元の曲(お手本)の旋律が頭に残り、似てしまう。</p> <p>・添削してもらおうと楽譜のミスなどがたくさんあったので、注意するようにしたい。</p> <p>・歌いやすいメロディーになるよう心掛けたい。</p>

図2 ふりかえりシートの自由記述（第2時限）

3. 第3時限目を終えて

学生のアンケート結果（表7・図3）から考察すると、前時まで一部形式を理解したことにより、無理なく二部形式の創作に移ることができ、多くの学生が二部形式についても理解することができた。学生にとって、一部形式より二部形式の方がドラマの流れをつかみやすく、イメージをふくらませやすかったことが分かる。また3段目には様々な作り方があるため、工夫のしがいがあるようだった。「変化」の面白さを感じながら、積極的に工夫を凝らした旋律を創作しようとする姿が多く見られた。創作に対する抵抗は随分となくなり、慣れてきたことで少しずつ自信を持つことができた学生も増えてきたようにも感じた。一方で、3段目の部分に苦勞し、思うような旋律が浮かばず困っていた学生もいた。使用するリズムや音を変えることで雰囲気の違いになることを伝え、それぞれの学生の状況に合わせたアドバイスをしていたが、なかなか限られた時間で全員を見ることは難しかった。適当に音を選択して当てはめているような学生がいることも課題であった。

表7 ふりかえりシートの自己評価項目と評価の平均（第3時限）

自己評価項目	評価の平均
イメージを膨らませ、表現に工夫して創ることができたか	4.5
二部形式について理解することができたか	4.6

<p>＜成果＞ ・前回の授業で作った一部形式の作品を利用し、二部形式の作品を作ることができた。</p> <p>・二部形式で書くことで、今までより曲らしくなった。bb'の雰囲気も変えることができた。</p> <p>・音楽はドラマであるということを意識して二部形式に起承転結の変化を当てはめ、創作することができた。</p> <p>＜課題＞ ・もっと曲作りに慣れたい。楽に曲を作れるようになりたい。</p> <p>・3段目だけ雰囲気を変えるのは難しいです。一曲の中で物語があるような曲を作りたいです。</p> <p>・3段目と4段目のつながりがしっくりこないの、次回はもう少しアレンジしていきたい。</p>
--

図3 ふりかえりシートの自由記述（第3時限）

4. 第4時限目を終えて

表8や図4から分かるように、二部形式の作品をほぼすべての学生が自分の力で完成させることができたことが一番の成果である。能力の差はあるものの、段階を踏んで形式について学び、創作していったことにより、明らかな成長が窺えた。また、ペアで完成した作品を交流するという活動もとても有効であった。相手の楽譜上のミスを見つけることだけでなく、それぞれの作品の良さを見つけ合い、その美しさを感じ取ることができたようであった。さらに、旋律だけでなく伴奏をつけた学生も現れ、その作品を紹介したことで他の学生も憧れを抱き、自分の創った旋律に伴奏をつけたいという創作への前向きな感情を引き出すことに繋がった。その一方で、音楽の知識が乏しく、自分の頭に思い浮かべたリズムをうまく楽譜に表すことができなかつたり、1曲通して同じような雰囲気の曲になってしまったりと、苦勞する学生がいたのも事実である。楽典の知識を身に付けるためには、継続した指導が必要であると感じた。

表8 ふりかえりシートの自己評価項目と評価の平均（第4時限）

自己評価項目	評価の平均
お互いの作品の良さを見つけ合うことができたか	4.5
二部形式の作品を完成させることができたか	4.7

- ＜成果＞ ・他人の曲の面白さに気づくことができた。自分の曲にも愛着を感じるようになった。
 ・添削してもらい、アドバイスを受けて気が付くことがたくさんあった。
 ・最初は全く分からないと思っていたが、自分にも曲がかかるのだと分かった。
- ＜課題＞ ・きちんとした楽譜をつくったつもりでもお互いの確認の時ミスが3つもあった。正しい楽譜を書けるようにしたい。
 ・旋律を作れても、それを正確に楽譜にすることがむずかしい。
 ・リズムや雰囲気を変えたくても中々変えづらいところが難点だと思った。

図4 ふりかえりシートの自由記述（第4時限）

Ⅵ. まとめ

この授業における「創作」とは、学生が単に曲を作るということだけではなく、教員となった時に児童の創作活動への助言、指導が行えるようになることが最も重要なことであり、そのための創作の実践を行うことを主たる目的にしている。従って、担当者としては、まず児童に参考として示す形式の把握やヒントの与え方等を、体験を通して学んでほしいと考えている。そして、その課題がクリアされた後に、曲としての魅力や応用力の多彩さを望みたいと考えている。

今回の実践によって見えてきた成果と課題は以下のようである。

成果としては、共通の指導案の作成、担当者同士での教材の提供等、「創作」に対するお互いの考え方や指導法、また資料の与え方等を参考にし、実践したことで、これまで見落としていた指導法や資料に気づくことができ、明らかに授業の効果が上がったと思われる。実践途中での担当者同士の授業に関する意見交換がスムーズに行え、小規模な指導法の改善が授業を行っていく中で可能であったのは、共通の指導案を使用していたことが大きい。担当者全員が同じ指導案を持つことにより、学生の持つ問題点をより明確に共有でき、その解決方法にも実感したことを基に意見交換をすることができた。担当クラスだけでなく、その学年全体の学生の理解レベルを共有することにより、大局的な観点から学生たちにとってのより良い指導方法、指導案を考えることができた。作成した指導案には、指導内容と時間との兼ね合いや学生の反応の予測等、まだまだ改善の余地はあると思われるが、担当者のその意気込みも、今回のお互いへの刺激によって大いなるものがある。授業への取り組みは、受講している学生だけでなく授業担当者をも刺激し、更なる高みを目指すべきものであるということを、再認識させられた今回の実践であった。

一方、課題としては以下のようなことが挙げられる。現時点での最良と思われる方法を採用して授業を行ったが、担当者それぞれが他者の指導案から採った部分への不慣れもあり、スムーズさを欠いたこともあった。これについては、その部分を主として実施してきた担当者からの意見を参考にするなどして、よりスムーズに授業に当たれるようにしていきたい。学生からの意見が多かったのは「形に添った創作で精一杯で、イメージを膨らませる事が出来なかった」というものであった。

また、自然な流れというものを（学生の経験の少なさから）自分で把握する事は難しかったようである。学生たちに創作指導のための形を習得させるとともに、学生自身が創作の面白さを感じ、自ら創作への工夫を考える取り組みをいかにすれば実現できるかということも課題である。指導案に沿って行った授業中の机間巡視によるチェックも、受講人数と時間の関係でかなり忙しかった。この問題は、ひとクラスの受講人数を変更できない以上、指導内容の時間配分を調整して行う以外ないと思われる。

反省のなかで初等音楽Ⅰとの関連についての意見も出されたが、この二つの授業は密接な関連を持っており、両科目を見ながら長いスパンで初等音楽の授業全体を眺めることの必要性も今後の課題である。今回は、一部形式、二部形式の創作に限って実践を行ったが、時間が許せばもっと初歩的な創作やわらべうたの創作など、各学年に設定された創作についての授業を行うこと、つまり教科書への対応を十分に見据えた授業の実践も重要な課題である。今回のような実践研究は今回のみで終わるのではなく、ある程度の間隔を置いて周期的に行い、検討を重ねていくことが必要であろう。


上記のような指導案、配付資料、及び授業実践の反省を踏まえ、既に各担当者はそれぞれが今後に向けて新たな指導案、配付資料の作成に着手している。


学籍番号 _____ 氏名 _____

【初等音楽Ⅱ】B部門 創作活動（第2時限）


『自作のリズムパターンで、一部形式の旋律を創作しよう』


☆前時の振り返り
自分が作った作品を見直してみよう！
Q. ルールに従って創ることができていましたか？正確に記憶できていましたか？
・前時に習った一部形式 例）とんび、星の世界（共に前半部分）

＜別パターンによる一部形式について知ろう＞
☆「春が来た」の楽譜を見ながら、下の五線に写譜してみよう。




☆「うみ」の旋律に注目してみよう。 ※（ ）長調



リズム:
固定ド:
移動ド:


リズム:
固定ド:
移動ド:

8小節の中に起承転結のドラマの流れがあるぞ！

☆リズムパターンを考えよう。（ ）拍子

1小節目 2 3 4

5	6	7	8

☆自作のリズムパターンで、一部形式の旋律を創作しよう。楽譜に飾りがないか必ず確認しよう！

①（ ）

②（ ）

③（ ）

④（ ）

→ Next. 二部形式の作品を創ってみよう。

図5 第2時限目の授業プリント

学籍番号 _____ 氏名 _____

【初等音楽Ⅱ】B部門 創作活動（第3時限）

『二部形式の特徴を理解し、「変化」部分の旋律を創作しよう』

☆前時までの振り返り
自分が作った作品を見直してみよう！
Q. ルールに従って創ることができていましたか？正確に記憶できていましたか？
・一部形式

☆「星の世界」（コンパース作曲）の旋律に注目してみよう
Q. 全部で何小節ありましたか？（ ）小節

Q. 前半部分と後半部分の違いや共通点は何だろうか？

☆「故郷の人々」（スワニー河）（フォスター作曲）の楽譜を見ながら、下の五線に写譜してみよう。








→ 各段の終わりに注目しよう！どんな感じがしますか？最後の音符の意味は？

☆形式について

- 異なる2つの大楽節から構成される楽曲の形式を（ ）と呼ぶ。
- 典型的な二部形式は、 $a(A+A')$ $b(B+A')$ 、またはその裏形の $a(A+A')$ $b(B+A')$ 、 $a(A+A')$ $b(B+B')$ 、 $a(A+A')$ $b(B+C)$ という構成をとる。
- 各大楽節内の第1小楽節は完全終止以外の終止となり、第2小楽節は（ ）となる。

☆二部形式で作られた他の作品
（例） 飛城の月（池澤太郎作曲）、夕焼け小唄（華川信作曲）など

☆「変化」部分の旋律を創作し、二部形式の作段に挑戦！

→ Next. 二部形式の作品を完成させよう。

図6 第3時限目の授業プリント